# 暑い！なんとかせんか
## クーラーが冷えきらん
### どうなっている労働環境改善

連日の猛暑続きで坑外での労働も暑さに耐えるのが大変ですが、これが坑内ともなると湿度との関係で文字どおり〝暑さとのたたかい〟です。

とくに夏場は入気温度が三十度になり、三十度から五十度にもおよぶ地熱と重なって、作業現場は耐え難い状態で疲労も蓄積されます。現場からは「風量が少ない」、「クーラー水が少ない」、「クーラーが冷えない」、「排気道は熱風で仕事にならん」、「切羽はどうにかよいが道中が暑い」と、連日のように環境改善の声があがっています。

三池労組は、毎年の労協・福利交渉で坑内温度を二十八度以下にするよう要求し、とくに夏場の対策については上期の生産会議で具体的な対策を追及してきました。

会社側は、今年の夏場対策として風量アップと機械力（冷房）の増強の二点をあげ、①有明鉱では通気専用坑道の確保、六十六冷凍トン二台の運転開始、②四山鉱では地熱四十度以下の上層七十卸への移行、本層六十卸のY型通気、③三川鉱では第二上層七十五卸の冷房強化、④全鉱的に主要排気道の断面拡大と覆工、⑤全鉱的には百八十冷凍トンの増強、などによって昨年よりは向上する計画であるとしていました。

坑内現場では、高温、高湿の中で汗でずぶぬれになって働いている。この劣悪な労働環境の改善が急がれなければならない。

部分的には改善された箇所もありますが、全体としては冷房力の不足が強く指摘されています。

問題点としては、①十五度前後の冷却水の温度をさらに下げること、②冷却水の絶対量を増やすこと、③冷房機の維持、管理を強化して目づまりや劣化を防ぎ、二十六度前後という冷房機、出口の温度を下げること、などが必要です。

冷房機の増設と冷却水の増量がなければ全体的な温度の改善はのぞめません。現状ではまったく余裕がなく、故障でも起こればお手あげの状態です。また掘進切羽などが集中している箇所では冷却水の奪い合いすらあるといいます。

抜本的な通気対策、当面冷房についての改善なしには、「快適な労働環境の実現」（衛生月間スローガン）は不可能です。現場での問題点を十分点検し、改善させることが急がれています。

**八月の重点項目**

**◎温度調査と改善要求**

とくに三十二度以上の箇所の調査と改善に取り組む。

---

広島被爆四十周年の八月六日、広島では核兵器廃絶を誓う諸行事がおこなわれましたが、午後から県立体育館で開かれた「原水爆禁止一九八五年世界大会ヒロシマのひろば」で採択されたアピールは次のとおりです。

## 「ヒロシマのひろば」からアピール

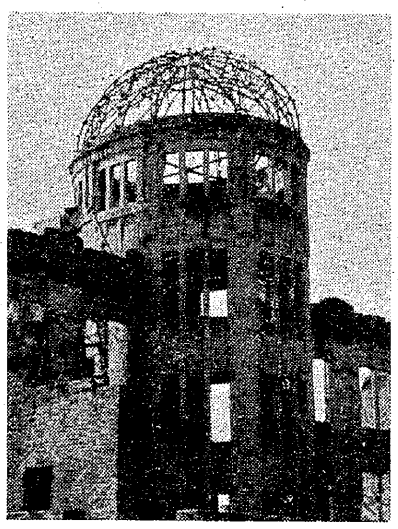
広島に原爆が投下されてから今日までの四十年間に、核兵器は十五キロトンの広島型原爆に換算して、毎日八十発ないし百発ずつ造られ続けてきたことになります。

核兵器がおそるべき量に達しているだけではありません。ミサイルの技術が進んで、運搬速度と命中精度がいちじるしく向上したため、実際に核兵器が使われる危険は、極度に強まっています。

もしいま、米・ソの対立、あるいは局地戦争や偶発事故によってひとたび核兵器が使われるなら、それはたちまち地球を破滅させる全面核戦争へと発展するでしょう。たとえ生存者があったとしても、大火災のばい煙とチリのために数カ月間も暗黒の冬が訪れ、放射能の灰は何年となく降り続くでしょう。絶望的な地獄が世界中に出現するのです。

いまからちょうど四十年前の八月六日、ここ広島に出現した地獄は、わずか一発の小型核兵器によるものでした。この核兵器でも、その年のうちに十四万人の命を奪い、生き残った二十数万人の被爆者の「からだ」と「こころ」とかわる最も緊急の課題なのです。

被爆四十年の今年、世界各地でより広範な人びとが核兵器廃絶のための力づよい行動に立ちあがっています。広島では核兵器に反対するさまざまな国際会議が催されました。原水爆禁止世界大会国際会議が開かれ「広島からの呼びかけ」も出されました。



被爆者の怒りがこもる原爆ドーム（広島）

「くらし」に深刻な影響を残しました。白内障・白皿病・各種のがん・胎内被爆による小頭症などの後障害が発生し、被爆者に言い知れぬ苦しみと恐怖を与え続けてきました。取り残された孤児や婦人や老人の生活は、とりわけみじめなものでした。被爆者の高齢化が進むなかで、みずから命を断った老人もあります。

核戦争を防ぎ、核兵器を廃絶することは、まさに人類の死活にかかわる最も緊急の課題なのです。

今日「ヒロシマのひろば」に結集したわたしたちは、あらためて核戦争の悲惨な結果について全世界の人びとに知らせ、核による抑止という考えをしりぞけ、核戦争に通じるいかなる道もはばみ、核兵器廃絶、核兵器使用禁止、核実験全面禁止などの拘束力のある国際協定の締結、非核地帯の拡大、非核三原則の厳守、非核自治体宣言の拡大、日米軍事同盟など軍事同盟・軍事ブロックの解消、国家補償にもとづく原爆被爆者援護法の制定、平和教育の推進のための行動に全力をあげて取り組むことを決議します。

これらのわたしたちの切なる要求は、米・ソをはじめとして核保有国が、人類の未来への責任を深く自覚し、みずから核兵器をなくすという決断をするならば、その実現に向けて大きく前進するでしょう。とくに米・ソ両大国は、現在進行中のジュネーブでの交渉を実らせ、ともに生きる道を探る重大な責任をもっています。

日本のみなさん！　世界のみなさん！　立場や考え方の違いを超え、核戦争を防ぎ、核兵器をなくすという共通の目的に向けて、力を合わせようではありませんか。連帯する世界の民衆の運動こそがわたしたちの目的を達成させる力なのです。

ばく大な費用とエネルギーを費やして造られた核兵器が、世界各地に配備される一方で、「第三世界」の民衆は、日々、飢餓と貧窮にあえいでいます。わたしたちは核兵器をなくす運動を、これらの民衆に平和でゆたかな生活をもたらす運動とも結びつけなければなりません。

広島、長崎の被爆から四十年の間、世論と運動の力によって、幸いにも第二のヒロシマ・ナガサキの出現を防ぐことができました。

しかし、核戦争の恐れは、ますます強まっています。今日ここに集まったわたしたちは、核兵器の残虐さをもっともよく知るこのヒロシマから、日本と世界のすべての人びとに訴えます。

核戦争を防ごう！　核兵器をなくそう！

ノーモア・ヒロシマ！　ノーモア・ナガサキ！　ノーモア・ウォー！

人類の未来にさいわいあれ！

一九八五年八月六日

原水爆禁止一九八五年世界大会ヒロシマのひろば

---

# あれから三十五年 (4)

## 家族ぐるみの闘い

高椋龍生

三池闘争を語るとき忘れてならないものに「家族ぐるみの闘い」がある。

ともすればくじけがちな闘いの陰の力となり、共に闘ってくれた子どもたちや妻のことを抜きにはできない。

〔職場日記より〕

昭和四十二年六月十九日。ガチャッと自転車の音が家の前で止まる。かあちゃんが仕事から帰ってきたのだ。帰ってくるなり、バタバタと西日の中での夕食づくり。涙ぐましいほどの活躍ぶりである。プロパンガスの噴く焔が地獄の火のように鍋の底をなめる。

やがて配膳、それにビールが一本ついている。子どもたちから歓声があがる。

「ハイ、とうちゃん『父の日』ごくろうさん、ありがとう」といいながらコップにとくとくとついでくれるビールのあわがノドを鳴らす。

「かあちゃんも一杯」

二人してのむ一本のビール、心と心がかよいあう一杯のビールのほろ苦い味の中に、人生の夢がいっぱいつまっている『父の日』である。

サロンパスも貼らんとぐったり寝たきりのかあちゃん

かあちゃんから本を取り上げ
テレビを取り上げ
話を取り上げ
考えも何もかも取り上げてしまう
合理化の　バカヤローッ

こんな詩を書かねばならぬときが一番つらかった。

かげでは差別に泣いたもんだ
涙は妻にも子どもたちにも
見せなかった
職制の前では目をむき歯ぎしりした

だれにも見せない涙でおれはおれの愚痴をおし殺した

三月十六日　職場日記より

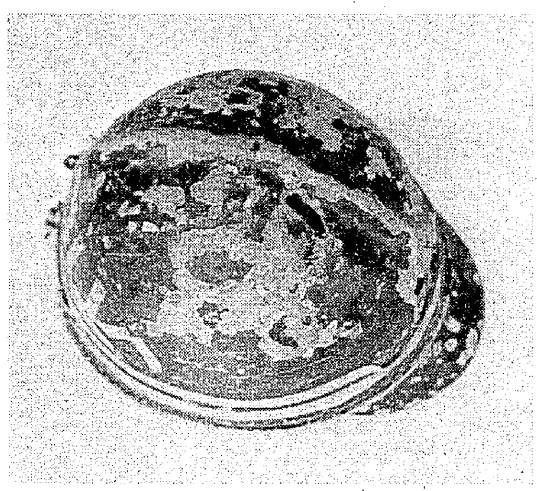
宮浦鉱上層五十卸総合ポンプ座八インチパイプのペンキ塗り（単独配役）。

終業直前であった。脚立の上からふと上げた坑帽がトロリー線に触れた瞬間、坑帽に激しく何かでたたきつけるような衝撃をうけ、白閃光が無気味に坑道いっぱいに広がり、坑帽の焼け爛れる異臭が発散し地獄を思わせた。私は夢我夢中で身をすくめていた。坑帽のビニール張りの汗皮と、木製の脚立が絶縁となり身を守ってくれたのである。坑帽の三本線の上に「オレヲコロスナ」と、白ビニールで貼り付けた帽の天辺に、長さ二センチ、幅一センチの疵口がぽかんと口を開けている。

坑帽は私の命の守り神である。来る年来る年、忘れることなく餅を飾り、心を新たにするのである。いまは家宝の一つとなった。

×　×

高椋さんは、大正五年二月二日生まれで六十九歳。昭和八年宮浦鉱に入社、十四年四月から四年七カ月間の兵役を経て復職、四十六年二月一日定年退職。その間坑内機械常一番として勤務するかたわら俳句などの短詩にしたしみ、現在は「ホトトギス」「さわらぎ」に拠る。詩文集『石蕗の花が咲きました』、句集『階老』がある。お住まいは大牟田市大字吉野一二三一の一。



中央右寄りの黒い穴が無気味に残っている。後方に「オレヲコロスナ」のテープの一部が見える。